

解 答

一

- (1) イ (2) エ
 (3) ① ア ② ウ ③ ア ④ 立ちどまつ [て作った時]
 (4) エ

二

- (1) あんぱい (2) 手
 (3) およばざるが (4) イ (5) 質
 (6) イ (7) 同様 (8) 勉強 (9) ア

三

- (1) 予定をこなす (2) 自由がきく [旅行]
 (3) 始終 (4) ウ
 (5) 五十歩 [百] 歩 (6) ウ・カ
 (7) 長い長い行程 (8) エ
 (9) 予定や時間にしばられずに、自分の体力と相談しながら自分の思う通りに行動すること。

四

- (1) 笛 [を吹く] (2) [係を] 務 [める] (3) 貨物 [列車]
 (4) 額 [の汗] (5) [水分を] 補 [う]

五

- (1) 彼は部屋へ・それでも平
 (2) エ (3) ウ (4) ア
 (5) 官軍 (6) 腹を切る
 (7) ① 理想 ② ア
 (8) 充分に英雄的な行為
 (9) ウ (10) エ

解 説

一 出典は、石垣りん「行く」（三木卓 編『生命の木』〈筑摩書房〉所収）。

- (1) 逆に言うと「木が～立ちつづけているということに」気づき「驚嘆するまでに」「四十年以上」かかったということで、「思いがけないことを発見した動搖」が込められた表現です。
- (2) 第一連と関連づけて考えましょう。「驚嘆する」とほぼ同様の意味を表す慣用句は、「目をみはる」です。
- (3) ① 草や木が「立ちつづける」姿とは、とりもなおさず草や木がたゆむことなく生きつづけ生長しつづける姿です。
 ② 作者が四十年以上草や木の姿に気づくようないまま人生を生きてきたということから考えます。
 ③ 人生において誰もが同じように行き着く先は「死」です。「年齢を重ねた作者が」とあるのも手がかりです。
 ④ 「まわりの事に目もくれず」前だけ見て生きてきた作者が、人生を「ふり返る」には、「立ちどまる」必要があるのです。
- (4) 「立ちどまると～追い立てられた」という文脈から考えましょう。

二 出典は、大村はま『心のパン屋さん』（筑摩書房）。

- (1) 直後の段落に、「セントポーリアは水の加減が難しい」とあることに注目してください。多すぎもせず少なすぎもせず、ちょうどいい程度に調節するのが「加減」です。これと同じ意味を持つ四字の言葉は「あんぱい」です。
- (2) 必要な処置のどこかに不十分な点があることを「手落ち」といいます。
- (3) 程度を越してやり過ぎればやり足りないと同じになってしまないので、ほどほどにするのがよい、という意味の言葉が「過ぎたるは及ばざるがごとし」です。
- (4) 何日に一ぺんとかとたずねている質問に、「乾いたらおやりなさい」と返事するのは、まるで「適当に」言っているかのように感じますね。
- (5) 文脈から判断して、「量」と対照的な言葉を入れましょう。
- (6) 一鉢ごとに違っている土の乾き具合を毎日じーっと見極めて、それぞれの鉢の状態に応じて水をやったりやらなかったりしているのですから、これは対象の変化を見つめているということになります。
- (8) 毎日の鉢の変化に応じて水やりのことを考えていると、「勉強しているような気がする～勉強しているときの樂し

みが、湧いてくる」とあることから、作者が本当に好きなものは「勉強」だとわかります。

- (9) 作者がセントポーリアの花をきれいに咲かせることができるのは、一鉢ごとの状態の違い、特に水の乾き具合をよく見極め、その鉢に見合った世話をしているからです。そのことを人間の成長に当てはめるとどうなるか考えましょう。

〔三〕 出典は、中西進『日本人の忘れ物2』〈ウェッジ文庫〉。

- (1) 「時間を気にしながら行動し～予定どおりにしか行動できない」現代の旅行を、筆者は「予定をこなすために旅行しているようなものだ」と評しています。
- (2) 「そんな旅行」とは、直前の「それほど綿密に計画を立てることもなく～目的も厳密にこれこれときめるわけでもない。いくらでも変更可能だし、行程も伸縮自在である」旅行、つまり「昔の旅行」のことです。傍線部の前の部分には、五字で書きぬけるような適當な言葉が無いので、後の方にある、「昔の旅行」について書かれている部分に注目すると、「自由がきく」という言葉が見つかります。
- (4) 「時間を気にしながら」「予定をこなすために」「あたふたと動き廻」ったあとの感想だと考えれば、「いそがしかった」だとわかるでしょう。
- (5) たいした変わりがないという意味の故事成語が「五十歩百歩」。ことわざでいえば「どんぐりの背比べ」。ともに、どちらも似たりよったりでよくないときに使うことに注意しましょう。どちらも同じくらいすばらしいときには「甲乙付けがたし」や「伯仲」を使います。
- (6) 「おくのほそ道」は17世紀末に松尾芭蕉によって、「東海道中膝栗毛」は19世紀初めに十返舎一九によって書かれました。「源氏物語」(紫式部)は平安時代、「平家物語」は鎌倉時代、「竹取物語」は平安時代、「舞姫」(森鷗外)は明治時代の成立です。
- (7) 傍線部の三つ後の段落で、小学校の五年生のときの東京から広島までの夜行列車の旅を回想し、「長い長い行程は、たびというふさわしい」と述べていることに着目しましょう。
- (8) 「まほろばの 旅のなごりの いのこずち」という俳句とその前後に書かれていることから考えます。万葉の原野を歩くうちにいのこずちが服につき、帰宅して気づくとそれが旅のあかしとして残っていたというのです。
- (9) 「相手方の時間に合わせる必要がない」のは、どのように動くからなのかを考えます。「相手方」にあたるものは、旅行ガイド、同行者、乗り物、旅館などです。

〔五〕 出典は、村上政彦『ハンスの林檎』〈潮出版社〉。

- (1) 「子供っぽいやり方」とは、「平野はロレンツがそこにいないかのように～建物に入った」とあるように、相手がそこにいてそのことに気づいているにもかかわらず、相手を無視するようにふるまうことを指している。同じように、平野がロレンツの存在をわざと無視している行為をえがいている文を探しましょう。
- (2) 平野がロレンツからフットボールの指導を真剣に受けようとしないのは、ロレンツのことを「下に見て」いることもあります。それよりも大きな理由は平野が「フットボールをただの遊戯だと考えて」いるからだというのですから、それは「根本的な問題」ということになります。
- (3) 「主觀」は、ものごとについてのその人個人の感じ方や考え方のことです。「平野中尉は私のことを下に見てます～フットボールをただの遊戯だと考えてます」というロレンツの言葉は、事実ではなくロレンツが勝手にそう思い込んでいるだけだ、と平野は言っているのです。
- (4) ロレンツの言い分は、「ただの言い掛かり」だと平野が言っていることから考えます。相手の気持ちや態度が自分の思っていることと大きくはズれていて、残念だ、という気持ちを表す言葉が「心外」。「意外」「案外」と似ていますが、「心外」には、ふんがいする気持ちがふくまれています。
- (6) 「負けた時の身の処し方」とは、戦いに負けたとき自分をどうするかということ。ロレンツたちは戦争に負けて俘虜(=虜囚)となって収容所にいるが、平野は負け戦になつたらどうすると言っているかを探しましょう。
- (7) ②「戦争の現実」を具体的に述べている直後の三文、ドイツ軍が死力を尽くして戦い、負けて、俘虜として収容所に送られて来た、ということから、どのようなことをいっているのかを考えます。
- (8) 「これが日本人だったらどうかね……」の段落で、平野の「腹を切る」という身の処し方と対比し、ドイツ人の「戦いに負けて、ひるみそうになる自分を奮い起こして、倦まず弛まず、丁寧に生活する」生き方を、松江は「充分に英雄的な行為」と言っています。
- (9) 恥ずかしかったり面目なかったりして顔を上げられず、下を向いている状態が「顔を伏せそうになる」です。
- (10) 「頭を下げて」はここでは具体的には、俘虜であるロレンツにお願いしてフットボールの指導を受けるようにすることです。そのことによって、自分たちがフットボールの技術を身に付けることを「勝つ」といっていることから考えます。